

[トップページ](#) >> 代表挨拶

## 代表挨拶

### 代表挨拶

数ある中から私たちのホームページに訪れて頂きましたことを、  
本当に嬉しく思います。  
心より、御礼申し上げます。



さて、唐突ですが、少しでも私のお話にお付き合い下さい。

**正直、格好悪い部分もありますが、ありのままの私を知って頂きたいので、  
隠さず、お話させていただきます。**

**介護に対する私たちの姿勢もご理解いただけるとと思いますので、  
どうか少しだけ、お付き合い下さい。**

それは、2008年3月1日、私たち茶話本舗デイサービス府中若松の風のオープン初日に起こった実際の出来事についてです。

その日は、神様も私たちの開設を祝福してくれているかのような良い天気、3月とは思えないくらい暖かな陽気の日でした。

当日のスタッフは、私も含めて4名。  
私は介護未経験者でしたが、私以外の3人は介護経験豊富な強者ばかり。

一方、当日の利用予定者は5名。  
私は、他の3人のスタッフに、  
「初日だから、ビシッと気合を入れていこうな」  
と声をかけながらも、秘かに、  
「利用者5名にスタッフ4名か。こりゃ、楽勝だな。」  
などと安易に考えていました。

### そして、朝9時になり、いよいよデイサービスがスタート。

一人、また一人と利用者が事業所に集まってきました。

慣れない場所だからでしょうか、皆さん、始めは緊張した顔をされていましたが、スタッフの声かけをきっかけに利用者同士のお喋りに花が咲き始め、徐々に和やかな顔へと変わっていきます。

それを見ていた私はますます安心感を覚え、  
「順風満帆の船出だな」  
などと自己満足に浸っていました。

しかし、そんな時。

ある利用者との出会いが、そんな私の自己満足を一気に吹き飛ばすことになります。  
その方は、田中京子(仮名)さんとおっしゃる方でした。

京子さんが事業所に到着したのは、確か午前9時40分ぐらいだったと思います。

その途端、他の方々とは明らかに異なる空気を私は感じました。

顔の表情からも

「ここはどこなの？何で私はここに来たの？」

という不安な思いが伝わってきます。

そもそも、着いて10分ほど経つのに、なかなか外から事業所に入ろうとしてくれません。

経験豊富なスタッフがあの手この手で声をかけ、半ば引っ張るようにして、やっと京子さんは中に入れてこられました。

しかし、表情は相変わらずこわばったままです。

スタッフや他の利用者の声かけにも、一切反応なし。

ようやくソファに座っていただいたものの、その後、思いつめた顔で、シクシクと泣き出してしまいました。

その後、

「何で私は、こんなところにいるの?」「お父さん(ご主人様のこと)はどこ?」「家に帰らせてちょうだい」などと、泣き声で私たちに訴えてこられます。

一生懸命説明を繰り返す私たち。でも、京子さんは一向に穏やかになりません。

いや、穏やかになるどころか、むしろどんどん興奮が高まり、最後には、

「私、帰る！」

と、玄関まで一人で歩いていってしまいました。

スタッフは後ろから優しく声をかけながら、その動きを遮ろうとします。

すると、

「何、すんの！触らないで！」「離せ、このヤロー！」「バカヤロー！」

などとの罵声がいきなり飛び出し、身体に触れたスタッフに殴りかかっています。

他の利用者も、凍りついてしまっていました。

そんな光景を見ながら、私は

「やばいな。何とか落ち着いてもらわなきゃ、、、」

と心の中でドキドキしていました。

しかし、その日は後もう一人、5人目の利用者を迎えに行く役割が私には残っていました。

「こんな時、代表の俺が出てしまっていていいのかな？迎えに行く役割を誰かに代わってもらおうか？」

そんなことを考えていた矢先、私の気持ちを察したのか、あるスタッフが、私に声をかけました。

「大丈夫です。私たちはこういう状況に慣れていきますので、任せて下さい。原田さんは最後の利用者を迎えに行ってもらえますか？」

「分かった、頼もしい言葉をありがとう。じゃ、お願いします。」

と言い、いまだドキドキしている自分の鼓動を感じながら、私は、初日最後の利用者を迎えに行くために事業所を出発しました。

その後、無事に利用者宅に到着し、穏やかに会話を交わしながら、私は事業所の近くまで帰ってきました。

そして、事業所まで後1分で到着、というところまで近づいたとき。

## 目を疑いたくなるほどの驚きの光景が、私の目に飛び込んできました。

何と、先ほどまで事業所の中にいた京子さんが、泣き叫びながら、靴も履かずに、しかも、もの凄いスピードで道路を走っているのです。

そして、その後ろを、私たちのスタッフが同じく猛ダッシュで追いかけていきます。

「一体何があったの？」

ビックリした私は、事業所に着くなり、中にいるスタッフに尋ねました。

すると、

「もの凄い力でスタッフを突き飛ばし、外へ出て行ってしまったんです。」

との返事。そんな折、追いかけているスタッフから事業所に連絡が入ります。

「後ろから追いかけていることに気がつくと、もの凄いスピードで走って逃げようとするんです。甲州街道(私たちの事業所の近くを走る大通りです)の信号も無視しようとするし、危なくてしょうがありません。私の体力ではとても無理です。誰か代ってもらえませんか？」

その言葉を聞き、他のスタッフは、

「どうしよう、、、」

「あんな状況じゃ、京子さんは、うちでは対応が難しいよね、、、」

などと不安そうに話をしています。

正直、私自身も同じような気持ちが頭をよぎっていました。

しかし、ここで代表である私が逃げるわけにはいきません。

しかも開設初日です。

「分かった、俺が代わる。何とか頑張ってみるから、皆は京子さん以外の人のケアをお願いするよ。とりあえず、今、どこにいるのか教えてくれ。」

と事業所内にいるスタッフに話し、その後、直ぐに交代しました。それから私は、先ほどまでのスタッフと同様、京子さんの後ろを追いかけることになりました。

スタッフから聞いた通りです。

私が後ろから追いかけていることに気付くと、京子さんは、

「着いてくるな、バカヤロー！」

と大声で叫び、赤信号をもものともせず、猛スピードで走って行ってしまいます。

そのため、私は、京子さんに気付かれないように、電信柱や物陰に隠れながら、着かず離れずの距離を保ち、ひたすら後を追いかけていました。

そのような状態がずっと続き、ふと気がつくと、交代してから既に約3時間が経過していました。

事業所にいるスタッフからも、心配の電話が何度も入ってきます。

## 「これ以上後を追いかけても埒(らち)があかないし、京子さんだって体調を崩してしまう。」

そう思った私は、この状況を強引にでも収束させてしまおう、と考えました。後ろから京子さんに走り寄り、抵抗されるのを承知の上で、京子さんの身体に抱きついたのです。

「ギャー！」「助けてー！」

悲鳴にも似た大声を上げ、京子さんは大暴れします。

周囲の人も

「何が起こったんだ？」

とビックリした顔で振り返っています。

でも、そんなことに構ってられません。私は、とにかく、この事態を収めようと必死になりました。

しかし、京子さんの興奮は収まるどころか、ますます高ぶるばかりです。何とか逃げ出そうと必死だったのでしょう、私はもの凄い力で顔面を殴られ、足を蹴られ、手のひらや腕に爪を立てられ、すさまじい抵抗を受けました。

一方、私は、そんな抵抗に我慢しながらも、

「京子さん、お願いだから落ち着いて！」「静かになって！」

祈るような気持ちを込めて、京子さんを強く抱きしめていました。

そんな状態が5分ほど続いたでしょうか、京子さんの抵抗が徐々に弱まり始めてきました。

でも、決して落ち着かれたわけではありません。

その証拠として、すすり泣きと共に、

「お父さん、、、」「怖いよ、、、」「助けて、、、」

というか細かい声だけが私に聞こえてくるようになりました。

## その声を聞きながら、私は、自分自身に情けなさを感じていました。

「俺は何をやってるんだ。よく考えたら、京子さんがこんなふうになるのは当たり前だよな。大好きなお父さんと離され、いきなり訳の分からないところに連れてこられ、やっとの思いでそこから逃げ出してきたら、今度はこんな見ず知らずの男に追いかけられ、あげくの果てに後ろからおさえられて自由を奪われて、、、京子さんにしたら、怖くてしょうがないのは当たり前だよな。でも、このまま外で走り回り続けていたって、京子さんにもいいはずはないし、、、一体どうしたらいいんだろう？何故、俺にはどうすることも出来ないんだろう？こんな思いをしてもらうために、俺は貯金をはたいてデイサービスを始めたわけじゃないぞ。皆に喜んでもらえて、社会にも役立つ事業だと思ったから始めたのに。。。。」

そんな思いが溢れ出し、お恥ずかしい話、私自身、涙が止まらなくなってしまいました。

そして、京子さんと私は、道路の真ん中で抱き合いながら、二人でおいおい泣き続けてしまったのです。

しかし、そんな時、京子さんの態度に大きな一つの変化が起こりました。

泣いている私の顔をジッと見ながら、京子さんが(泣きながら)顔を始めたのです。

その京子さんの姿を見た私は、よく分からないまま、つられて顔をしました。

すると、そんな私を見て、京子さんは私に話しかけてきました。

「何で泣いてるの？」

「いや、このままじゃ京子さんが身体を壊しちゃうと思って、何とか止めたいと思って後ろから押さえ込んだんだけど、よく考えたら、京子さんにとって、こんなに怖いことってないよね。だって、大好きなお父さんから離されて、いきなり知らないところに連れて来られて、やっとの思いでそこから逃げ出したのに、今度はこんな見ず知らずの男に押さえつけられて動く自由を奪われて、、、そんなことを考えていたら俺も悲しくなっちゃって。でも、このまま外にいたら、京子さん、風邪ひいちゃうだろうし。俺もどうしたらいいか分からないよ。ごめんね。。。。」

そう言いながら私はまたもや泣いてしまい、

「本当にごめん」  
と言って京子さんに抱きついてしまいました。

## すると、その時です。京子さんの態度がいきなり変わりました。

私の頭を撫でながら、  
「泣くんじゃない、泣くんじゃない」  
と、まるで赤ん坊をあやすかのように、私を抱きしめてくれたのです。  
その後、  
「あんた、いい大人がギャーギャー街の真ん中で泣いてるんじゃないよ。格好悪いじゃない。」  
と言って、笑いながら私の涙(と鼻水)を一生懸命素手で拭いてくれました。

「泣くなって、、、京子さんのせいじゃないか！」

心の中でそんな突っ込みを入れつつも、私は京子さんのいきなりの変化に驚いていました。

「京子さんはもう平気なの？」  
「私？私もう平気よ。それよりあんたよ！男なんだから、泣くのを止めてシャキッとしなさい」  
そう言われた私は、混乱する気持ちを抑えながら、京子さんに尋ねました。

「分かった。じゃあ、京子さん、さっきの場所まで一緒に帰ってくれる？」  
京子さんは、しばらく間を置いてから、ウン、と頷き、私の手を握り、並んで一緒に歩きだしてくれました。

こうして、京子さんは、私に対して心を開き、落ち着きを取り戻し、普段の明るい京子さんにもどられたのです。

長々とお話してしまい、本当に申し訳ございませんでした。  
その後、京子さんとはまだいろいろと続くのですが、一旦ここで終わりにさせていただきます。

私は、よくある代表の(お固い)ご挨拶ではなく、私が経験したこの出来事を、どうしても皆様にメッセージとしてお伝えしたいと思いました。  
何故なら、この出来事から得た気付きこそが、今の私たちの事業所の根幹を貫く価値観になっているからなのです。

大声を上げて暴れる京子さんを初めて見た時、私たちスタッフは一様に焦り、  
「早く収めなければまずい」「他の利用者に迷惑がかかる」  
という思いばかりが先行していました。

でも、言い換えると、その時の私たちは、京子さんの「心」ではなく、「行動」だけを見ていたのではないかと、思うのです。  
別の言い方をすると、京子さんに対して「落ち着いて欲しい」という私たちの一方的な思いばかりを押し付けてしまい、肝心の京子さんの気持ちが後回しになっていたのです。

その後、京子さんは、徐々に、穏やかで明るい、本来の姿に戻っていかれました。  
それは、京子さんの「行動」だけではなく、「心」を見つめることができたからなのだと私は理解しています。



利用者一人ひとりの「心」を見つめ、共感し、そして、その共感から  
安心や信頼が生まれる。  
それこそが私たちの考える介護の出発点であり、（繰り返しになりますが）  
私たちの事業所の根幹を貫く価値観です。

「安心」「信頼」の関係を土台とし、一人ひとりの利用者が、命の灯が消える最期の時までその方  
らしく、元気に暮らせることが出来るようにサポートさせていただきたい—  
それが私たちスタッフ全員の想いであり、存在意義だと思っています。

まだまだ未熟な部分も多い私たちですが、これからも、「安心」「信頼」の関係を基礎に、少しでも皆様  
のお役に立てるように頑張っています。

今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。

介護元気化プロジェクト株式会社  
代表取締役

原 田 匡

[▲このページのトップへ](#)

[トップページ](#) | [事業所紹介](#) | [私たちの姿勢](#) | [15の約束](#) | [料金表](#) | [1日の流れ](#) | [他社との違い](#)

茶話本舗デイサービス府中若松の風  
〒183-0005  
東京都府中市若松町2丁目18番地18号  
TEL:042-360-6933 / FAX:042-360-6934

茶話本舗デイサービス三鷹連雀の風  
〒181-0012  
東京都三鷹市上連雀3-7-1  
TEL:0422-40-5055 / FAX:0422-40-5077